

第3章 フィンランド叙事詩カレワラ研究と政治参加 —第二次世界大戦期を中心に—

石野 裕子

はじめに

『カレワラ (*Kalevala*)』¹は、19世紀に起こったフィンランド・ナショナリズムの源泉として位置付けられる叙事詩である。すなわち、『カレワラ』は、かつてスウェーデン王国の領土であり、言語的・制度的同化が進んでいた一方で、ロシア帝国の支配下にあったフィンランドに、独自のフィンランド文化の形成を目指す土台となった叙事詩として知られている。『カレワラ』の発祥地とされたロシア（ソ連）領東カレリアは、実際には歴史的にフィンランド（スウェーデン）に属したことがないが、フィンランド文化の源泉としてフィンランド人の「郷愁的」思いを引き出した。このような主張は、東カレリアなどへの膨張を目的とする大フィンランド (*Suur-Suomi*) 主義²運動と結びつき、フィンランドが東カレリアを獲得するべきだという主張へと発展した。これらの運動は、カレワラ研究者たちによって「学問的」に支えられた。さらに第二次世界大戦期において、カレワラ研究者たちは、フィンランドによる東カレリア獲得を「正当化」するカレワラ解釈、すなわち東カレリアはフィンランドに属することを「学問的」に証明をすることで戦争協力を行った。

その代表的なカレワラ研究者が、ヤルマリ・ヤーッコラ (*Jalmari Jaakkola* 1885–1964)³である。ヤーッコラは、カレワラの登場人物ならびに彼らの行動や出来事が基本的に史実であるとみなし、伝説の史実化を行った歴史学者である。ヤーッコラは、第二次世界大戦期に勃発した二度目のソ連＝フィンランド戦争である継続戦争⁴直前に、フィンランドにソ連領東カレリア獲得の正

¹ 『カレワラ』は、フィンランドとロシアにまたがったカレリア地方を中心に、口承で語られている叙事詩を、医師エリアス・ロンルートが編纂したものである。そのなかで、『カレワラ』には、1835年に書かれた『旧版カレワラ (*Vanha Kalevala*)』と1849年に1835年度版を修正した『新版カレワラ (*Uusi Kalevala*)』とがある。通常、『カレワラ』と呼ばれているのは、『新版カレワラ』を指す。カレワラ研究は、ロンルートが編纂した『カレワラ』の研究から出発したが、次第に編纂される以前のカレワラに注目が集まっていった。本稿では、ロンルートが編纂したものを『カレワラ』、編纂される以前から存在した口承詩をカレワラとする。

² フィンランド領を拡張するために東カレリアからエストニアまでを含む領土獲得を意図した膨張論。もともと、この思想は、スウェーデン王国支配下においても、「近親民族」思想と重なった形で存在していた。1910～20年代に起こった「大ブルガリア主義」「大セルビア主義」などにその類似点が見られるように、国土防衛の手段として領土を拡大しようとする思想自体は特別なものではなかった。「大フィンランド」が依拠した近親民族思想は、フィンランドが独立する以前にすでに存在し、時代の変遷につれて、その意味合いが異なっていった。すなわち、独立以降、「大フィンランド」は、政治権力（国家）が行うべき政策として提言されることによって、国際権力政治の舞台における国家の安全保障を担保する構想として、膨張主義的・侵略的な色合いを帯びたものになったのである。

³ ヤーッコラの略歴については附属資料を参照。

⁴ フィンランド側からみると、第二次世界大戦中に勃発した対ソ戦争を、冬戦争（1939年11月30日～1940年3月12日）と継続戦争（1941年6月22日～1944年9月19日）としている。フィンランド政府は冬戦争で失った

当性があることをナチス＝ドイツに「歴史的」に証明する覚書を執筆することで、政治的な役割を果たした。ヤーッコラは、その覚書においてもソ連領東カレリアがフィンランドに属する「歴史的」な証拠のひとつとしてカレワラを挙げている。

ヤーッコラは、1932年にヘルシンキ大学で初めて設けられたフィンランド史の講座を担当した学界の中心的な人物であり、彼のカレリア人の起源に関する説は、第二次世界大戦後まで学界の定説となるほど影響力をもった⁵。加えて、ヤーッコラのカレワラ研究は、民俗学分野において大きな影響力を有していた。本研究においては、そのヤーッコラのカレワラ研究と政治参加を考察することで、フィンランドにおける神話研究と歴史の問題を考察する手がかりとしたい。

(1) 研究史

この問題に最初に火をつけたのは、アメリカの民俗学者ウィリアム・ウィルソンであった(Wilson 1976)。ウィルソンは、フィンランドにおけるカレワラ研究の歴史にナショナリズムが強く反映されていることを指摘し、フィンランド独立以前から、独立志向を越えて膨張主義的な性格をすら抱いたフィンランド・ナショナリズムの性格形成に力を持ったと主張した。そのなかで、ウィルソンは、ヤーッコラを大フィンランド主義運動に連動した研究者の一人として取り上げている。従来、フィンランドで指摘されなかったカレワラ研究者とナショナリズムとの関係を明らかにしたウィルソンの研究は先駆的であったが、外国人であるウィルソンがフィンランド史のいわゆる暗部に大胆に触れたこと、さらにウィルソンの研究が歴史研究としては粗雑だったことにより、フィンランドの学界においては積極的には受け入れられなかった。

フィンランド史において「タブー視」された、この問題は、いってみれば自分たちの過去の「汚点」をさらけ出すことになるので触れられることは少ないが、そのなかで、ヤーッコラの研究活動に関する研究には、大きくわけて2つの傾向がみられる。1つは、ヤーッコラの歴史研究に関する研究である(Luukko 1965; Niitemaa 1964)⁶。しかし、これらの研究では、膨張主義運動に関連する仕事にはいっさい言及していない。2つ目は、ヤーッコラが第二次世界大戦中に行った戦争協力に関する研究である(Manninen 1980; Herlin 1996)。しかし、ヤーッコラの歴史研究と

領土(フィンランド領カレリア地域)の回復を目的としたため、二度目の戦争を継続戦争と呼び、ドイツ・ソ連戦争とは別であると主張した。本報告では、両戦争をわけるため、フィンランド側の呼称である冬戦争、継続戦争を使用する。

5 ヤーッコラは、カレリア人の起源にかんして、現在のフィンランド人の一部であるハメ人が東方へ進出し、ラドガ湖西北に定着し、これに東からきた若干の原フィン人が加わってカレリア人が形成されたとする説を主張し、カレリア人はフィンランド人の一部であるという説を提唱した。この説は、戦後、フィンランドの歴史家ヘイッキ・キルキネンが、ヤーッコラの推論には事実にもとづく判断以上のものがあつたとし、逆に東からきた原フィン人の要素が強いと主張するまで、フィンランド学界の定説となった。この説は、カレリア人はフィンランド人の一部であるという説でもって、カレリア民族とフィンランド民族の「兄弟民族」説を後押しすることになった。

6 なお、民俗学の見地から、ヤーッコラのカレワラ研究に言及している研究として、Hautala(1954)が挙げられ

政治活動を両面からとらえた研究は、いまだ現れていない。

(2) 問題提起

ウィルソンの限界は、フィンランド独立以前から第二次世界大戦に至るまでのフィンランド・ナショナリズムを、一律に膨張主義的な性格を持っているものとして扱ってしまった点、つまりナショナリズムを歴史的な文脈で捉えなかったため、時代ごとに異なるフィンランドの政治状況を見逃してしまった点にある。それゆえ、そこから引き出される学問研究と政治の関係についてのウィルソンの主張は、歴史性が欠如した画一的な議論である。すなわち、フィンランド・ナショナリズムを考察するには、フィンランド独立前と後、フィンランドの右傾化がみられた 1930 年代、第二次世界大戦期の冬戦争を経て、継続戦争にいたる時代ごとの膨張主義運動とその思想背景を段階的に把握することが必要である。

本研究では、フィンランド政府がソ連領東カレリアへの膨張主義政策を実行に移した第二次世界大戦期に注目し、フィンランド政府と強いつながりがあった歴史学者ヤーッコラのカレワラ研究と政治参加の過程を考察することで、フィンランド政府が抱いていた膨張主義思想の背景の考察を試みる。

1. ヤーッコラの研究初期—地方史からフィンランド史へ

1905 年にヘルシンキ大学に入学、歴史を専攻したヤーッコラは、故郷サタクンタ地方の地名や伝承を収集し、それらを記録する手法を用いて、サタクンタ地方の「中世史」を研究し始めた。1917 年に、フィンランドがロシアから独立し、翌年に内戦が勃発すると、ヤーッコラは、新聞『ウーシ・パイヴァ』に、歴史からみてフィンランドには共和政思想が存在していないと主張し、フィンランドのとるべき道は共和政ではなく君主政であると主張する連載を執筆するなど、政治的な言動も行っていた。1921 年、ヤーッコラは博士論文『聖エイリークの聖伝、信仰、伝説の誕生』を提出し、翌年には博士号を授与された。1923 年に、ヤーッコラはヘルシンキ大学史学科で北欧史担当の講師となり、中世史を専門に研究していく。

伝記によると、ヤーッコラは、研究当初からユルヨ＝コスキネンが確立したフィンランド中心のフィンランド史⁷⁾に深く関心を抱いており、また、当時フィンランドの歴史書が、スウェーデン中心に描かれていたのに不満を抱いていたという (Luukko 1965: 203)。そのことがフィンランドの「過去」を新たに評価する研究につながっていったのではないかと推測することができる。

るが、1935 年のカレワラ研究のみを対象としている。

⁷⁾ 1881 年に書かれたユルヨ＝コスキネンの『フィンランド史 [Suomen historia]』を指す。

2. ヤーッコラのカレワラ研究初期

ヤーッコラのカレワラ研究の初の成果は、1923年のフィンランド文学協会の会議における発表であった。ヤーッコラは、「カレワラ英雄叙事詩の歴史的起源について」という発表で、故郷サタクンタの地名と家族名にカレワラにでてくる英雄たちの名前が存在することを指摘し、それらの英雄はサタクンタからカレリア地方に遠征した実在の人物であったという仮説を発表した。発表を聞いた当時の代表的な民俗学者であったカーレ・クローンは、ヤーッコラにフィンランド史を研究するように勧めたことが契機となり、ヤーッコラはカレワラ研究を続けていった。民俗学者クローンは、カレワラには歴史的背景が存在すると主張した人物である。この出会いをもって、クローンの史学的なカレワラ解釈をヤーッコラが引き継いだという (Evijärvi 1963; Luukko 1964; Wilson 1976)。さらにこの出会いから、「フィンランド中世史と古代詩をひとつにする共同作業が始まった」と表現する先行研究も存在する (Kunuuttila 1999: 116)。たしかに、クローンに自身の研究を認められ、支援を得たヤーッコラは、これを契機にカレワラ研究に従事していくことになる。しかし、クローンはカレワラを史学的に解釈した結果、カレワラに歴史性が見出せるとの見解を示すに留まったのに対し、ヤーッコラはカレワラの登場人物やそのなかで起こった出来事が歴史的事実であったという仮説から出発した点で、両者のカレワラの歴史性に関する認識は決定的に異なっている。クローンは、カレワラの歴史性を証明しようと試み、一方ヤーッコラは、カレワラそのものを歴史としてフィンランド史に組み込んでいったのであった。

3. ヤーッコラのカレワラ研究中期

世界恐慌が巻き起こった1929年に、フィンランドでは、共産党の集会が襲われた事件を契機に、農民による反共運動である「ラブア運動」が全国的に発生し、この事件がきっかけで共産党非合法化要求へと発展するなか、フィンランドの右傾化が強まった。1932年にフィン・ソ間で不可侵条約が締結され、当面の危機が回避されたものの、それは、フィンランド側に大フィンランド主義の高揚をもたらし、対ソ関係は緊張した。1935年に『旧版カレワラ』100周年を記念するカレワラ祭が全国で盛大に催された。このカレワラ祭にあわせて、ヤーッコラは、『フィンランド古代史—部族の時代と「カレワラ文化」』を刊行し、その要旨を多くの新聞、雑誌に掲載した。ヤーッコラは、言語学、考古学、地名学の手法を用い、従来考古学の発見のなかでしか研究されてこなかった「フィンランド古代史」(800～1100年)に焦点をあて、フィンランドに「古代」の存在を指摘し、それは優れた文化を持ち、独立性を有していたと主張した。また、カレワラを「歴史的文化価値」と位置付ける一方で、カレワラの中で展開される物語を史実としてフィンランド史に

組み込んだ。つまり、ヤーッコラは、カレワラに登場する出来事は、基本的に史実に基づいていると主張したのであった。1935年のカレワラ祭は、フィンランド全土に渡って行われた国家行事であり、フィンランド政府にとっても政治的に国民の団結を促す大きな機会でもあった⁸。そのなかで、ヤーッコラの著書は学術的に高い評価を受けると同時に、その内容が新聞や雑誌に掲載されることによって、一般にも広く知られるようになった。

4. ヤーッコラのカレワラ研究後期（第二次世界大戦期）

カレワラ祭以降、ヤーッコラは、フィンランド史研究において、フィンランドの「過去」の独自性や「東」からの脅威からヨーロッパを防衛する役割をフィンランドが担ってきたとして、ヨーロッパにおけるフィンランドの重要性を主張した。1940年1月28日には、ヤーッコラは、雑誌『銃の兄弟』に「フィンランドと、北と南の国との関係」を連載し、スウェーデンの十字軍遠征以前から、フィンランドと「南」の国との文化的な協調には、注目すべき経済的、精神的交流が存在していたと述べて、ヨーロッパとの連帯を主張している。

1940年3月に冬戦争が終結し、工業都市ヴィープリを含むカレリア地峡の領土を始めとする全国土の10分の1を、フィンランドはソ連側に譲渡しなければならないことになり、経済的に苦境に立たされた。同年、ヤーッコラは、『フィンランド史の概略』を刊行し、序文で以下のようなことを述べている。

「先般の戦争〔冬戦争〕時、現代の研究に即し、だれもが認めるような祖国の歴史概説がないということに気付き、数人の友人からの激励もあってこの本を著した。」（括弧一筆者）

ヤーッコラは、この本の最初の章で「フェンノ・スカンディア」の定義を掲げている。「フェンノ・スカンディア」とは、スウェーデン・ノルウェー・フィンランド・コラ半島・東カレリアが属しており、地理的にも精神的にもつながった地域であるとヤーッコラは主張している。また、フィンランドとヨーロッパ諸国とのつながりを強調し、逆に「東」からの「異文化」の影響は、「西」の影響以上に邪悪であったと、ヤーッコラは主張している。

冬戦争後、フィンランドはノルウェー・スウェーデンとの防衛同盟によって自国の安全を保障していこうと望んだが、ソ連はこれに反対し、さらに、さまざまな要求をフィンランドに出し、圧力を加えていった。こうしたソ連の脅威に直面し、フィンランド政府は、ソ連の対抗勢力であるナチス＝ドイツに注目するようになり、9月に、ドイツ軍のフィンランド領通過権を認めるなど、ナチス＝ドイツ政府と戦争協力体制を築いていった。

領土をめぐるソ連との要求に対応する中で、1941年5月17日に、ドイツ駐在フィンランド公

⁸ 一方、東カレリアのペトロスコイで亡命共産党員シロラらによるカレワラ祭が、フィンランド本国に対抗する形で行われ、カレワラをカレリア人のものだと主張した。

使キヴィマキは、大統領リュティに、フィンランドがソ連領東カレリアを獲得する正当性があることを、ドイツ政府に示すための証拠を要求した。リュティは、ヤーッコラにそのための研究を極秘に委託した。5月下旬にはドイツ軍部とフィンランド軍部間では、フィンランドの対ソ戦争参加予定を密かに合意した。覚書は、ドイツ側が戦争に勝利した暁には、フィンランドがソ連領東カレリアを獲得することを、事前にドイツ側に納得させておく材料の一つであったのであろう。覚書執筆依頼から1ヶ月もたたない6月13日には、完成された覚書『東カレリア及びピコラ半島問題』が伝書使によって在ドイツ・フィンランド公使館に届けられ、それはただちにドイツ語に翻訳され、ドイツ政府関係者、研究者に送付された。この覚書は、カレリア学徒協会（AKS）の資料を使用し、フィンランドが東カレリアを獲得する正当性がある理由を、歴史的背景から経済的・地理的背景に至るまで示しており、カレワラを一つの大きな歴史的「証拠」としている。また、フェンノ・スカンディア構想に基づいた、北欧との連帯を強調し、北欧全体の利益のためにフィンランドは東カレリアを獲得しなければならないと主張した。6月22日に独ソ戦争が勃発すると、25日にフィンランド政府は、対ソ戦争に踏み切り、ここに継続戦争が勃発した。

継続戦争さなかの10月に、覚書は一般大衆向けに書き直され、『フィンランドの東方問題』として書店で販売された。1942年1月には、フィンランド外務省の要請で『フィンランドの東方問題』の英、仏、スウェーデン語版が発売され、それらは世界各地の駐在公使館に配布された。しかし、1944年9月19日の継続戦争終結後に、フィンランドは、東カレリア獲得はおろか、冬戦争で失われた土地すら回復することなく、厳しい休戦条件を呑むことになった。

5. ヤーッコラの研究の特徴

以上、簡潔であるが、ヤーッコラのカレワラ研究の経緯を概観してきたが、ヤーッコラの研究には大きく分けて4つの特徴が見出される。

1つは、フィンランドに独自の「過去」を追求したことである。ヤーッコラは、フィンランド中心のフィンランド史の確立を目標として研究を続け、それがカレワラを、研究対象として扱うきっかけになったのである。

2つ目は、カレワラに描かれている主人公たちは実際の人物であり、起こった出来事は基本的に史実であると主張し、これをフィンランド史に組み込んだことである。このことは、フィンランド「古代」に独自の文化が存在していたという歴史的「証拠」として位置付けられた。ヤーッコラの著書『フィンランド古代史一部族の時代と「カレワラ」文化』は、歴史学科及び民俗学科の教科書として使用されるなど、フィンランドの学界においても同時代的に認められた⁹。また、当時の代表的な民俗学者であったマルッティ・ハーヴィオの「カレワラとカレリアは分離できな

⁹ 1939年からヘルシンキ大学民俗学科では、『フィンランド古代史一部族の時代と「カレワラ」文化』のカレワラを中心とした詩に関する後半の章（380～475ページ）が教科書に指定された。歴史学科では、この著作以外にも

いものである。カレリア人とフィンランド人にとって共有の文化遺産であるカレワラを、カレリア人が現在の世代のために保持し続けてくれた¹⁰という発言に見られるように、ヤーッコラのカレワラに対する姿勢は、当時のカレワラ研究の流れに沿ったものであった。しかし、カレワラを史実として研究に取り込む姿勢はヤーッコラ独自であったといえる。

3つ目は、「フェンノ・スカンディア構想」を掲げ、フィンランドと東カレリアとのつながりを地理的にも証明しようとしたことである。「フェンノ・スカンディア」とは、そもそも1898年にフィンランド地理学者ウィリアム・ラムサユがフィンランド、スウェーデン、ノルウェー、コラ半島、東カレリアを地理学的に共通性があるとして名づけた地理学の用語である¹¹。ヤーッコラは、この地理学用語を使用し、これらの地域は、地理的だけではなく精神的につながっていると強調することによって、東カレリアはフィンランドの一部であることを主張した。

4つ目は、「西」との連帯を強調することで、「東」の脅威に対する「防波堤」であるフィンランドの「西」防衛の役割を重視したことである。ヤーッコラは、ソ連領東カレリアを回復した失地の防衛上の見地からフィンランドが獲得することを正当化する理由として掲げた。

第二次世界大戦期には、他の歴史学者たちもヤーッコラ同様のプロパガンダ本を執筆するなどの戦争協力へと向かった(Herlin 1996)。その内容は、ヤーッコラの覚書同様、フィンランドが東カレリアを獲得する正当性があることを証明しようとするものであった。しかし、ヤーッコラは、この主張をすでに戦前からその歴史研究の中で展開しており、その内容は覚書と多くの共通性が見出される。そのことは、まさにヤーッコラの研究が政治と関連したものであったことを証明しているのではないだろうか。

結論にかえて

以上のように、ヤーッコラの研究姿勢は、第二次世界大戦以前から自身の政治関心と結びついたものであった。そのヤーッコラの研究の特徴は、まさに当時のフィンランド国家が抱えていた問題を反映していたといえよう。すなわち、1917年の独立以降、一小国にすぎなかったフィンランドは、ソ連やドイツといった大国に挟まれた状況において、いかに国家を維持していくのかという大きな問題に直面していた。その解決方法のひとつとして、「イルレデンタ」が浮上したのであるが、この主張は、当時の東ヨーロッパにおいてもみられ、特別な考えではなかった。フィンランドにおいて、「イルレデンタ」は、大フィンランド主義運動として現れ、叙事詩カレワラの故郷といったフィンランド人の「望郷的」思いと重なって、フィンランド国内で影響力をもった。

『フィンランド中世時代初期』、のちに『フィンランド史の概略』などの著作も教科書として採用された。

¹⁰ Wilson (1976: 182) を参照。

¹¹ それ以前にも、1837年に植物学者E. A. ヴィルゼンが博士論文でのロシア領東カレリアを含めた東側境界を「自然的歴史的」なフィンランドの境界であると発表したり、ザクリウス・トベリウスも同様の主張をするなど、ロシア領東カレリアを含めたフィンランドという概念が、フィンランド独立以前からフィンランド知識人に存在していた。

実際、フィンランド独立直後に、義勇軍が東カレリアに遠征するなど、実行に移されたこともあった。こうした勢力を内包したフィンランド・ナショナリズムは、ソ連との緊張関係が続いていく中で、ラプア運動にみられた右傾化の道を強めた。フィンランドが、冬戦争でソ連に敗北し、フィンランド領カレリアを譲渡しなければならない事態に陥った時、フィンランド国内には「失地回復」という目的が生まれた。ナチス＝ドイツが1941年6月に対ソ戦争を始めた時、フィンランド政府は、ソ連領東カレリアを含めた「失地回復」と「未回収地の回収」を求め、継続戦争に突入したのであった。

フィンランドの「過去の栄光」やフィンランドの「古代」の独自性を主張したヤーッコラの研究は、このようなフィンランド・ナショナリズムの流れのなかで生み出され、フィンランド政府の膨張主義政策に取り込まれたのであった。

しかし一方で、カレワラという神話を歴史とみなすことによって、フィンランド独自の「過去」をつくり出す作業はヤーッコラ独自のものであった。このような背景には、従来のスウェーデン中心のフィンランド史を再構築しようとしたヤーッコラ自身の研究目的と関連していたのではないかと推測できる。この仮定の証明が今度の課題である。

附属資料

ヤーッコラ (Jalmari Jaakkola 1885-1964) 略歴

- 1885年 サタクンタ地方、エウラヨキの裕福な農家に生まれる
- 1909年 ヘルシンキ大学哲学科の博士候補生となる
- 1917年 フィンランド独立
- 1918年 新聞『ウーシ・パイヴァ』に共和政反対の記事を連載
- 1921年 博士論文『聖エイリークの聖伝、信仰、伝説の誕生』提出
- 1922年 哲学博士号授与
- 1923年 ヘルシンキ大学史学科北欧史担当の講師となる
- 1932年 ヘルシンキ大学史学科教授となり、初めて設けられたフィンランド史の講座を担当する
- 1935年 『フィンランド古代史一部族の時代と「カレワラ」文化』出版
- 1937年 『フィンランド中世時代初期』出版
- 1940年 『フィンランド史の概略』出版
- 1941年 覚書「東カレリアとコラ半島問題」執筆
→後に『フィンランドの東方問題』として、独・フィン・英・仏・スウェーデン語版が出版される
- 1944年 『フィンランド中世中期』出版

1950年 『フィンランド中世時代後期 I』出版
1954年 ヘルシンキ大学を定年退職
1955年 フィンランド歴史学協会名誉会員及びトゥルク大学名誉教授に選出
1956年 『フィンランド中世時代後期 II』
1964年 死去

<参考文献>

外国語文献

Kansallisarkisto

Risto Rytin kokoelma

Ulkoasiainministeriön arkisto

110 C 3a Itä-Karjala teos prof. Jalmari Jaakkola

UM sähkösarja 1941-1942

Evijärvi, Irja-Leena(1963) ”Kaarle Krohn: Elämä ja toiminta”, *Suomi*, No.110.

Hautala, Jouko(1954) *Suomalaisen kansanrunouden tutkimus*, Helsinki: SKS.

Herlin, Ilkka(1996) ”Linjoilla ja linjojen takana. Historioitsijat sodassa”, in Ahtinen, Pekka, ja Tervonen, Jukka eds., *Menneisyyden tutkijat ja metodien vartijat:Matka suomalaiseen historiankirjoitukseen*, Helsinki: SHS.

Jaakkola, Jalmari(1922) *Pyhä Eerkin pyhimstraditsiorin, kultin ja legandan synty*, Helsinki: SKS.

Jaakkola, Jalmari (1927) ”Kalevalan sankarirunojen historiallisperäisyydestä”, *Suomi*, V: 4: 3.

Jaakkola, Jalmari (1935) *Suomen varhaishistoria: Heimokausi ja “Kalevalakulttuuri.”*, Porvoo: WSOY.

Jaakkola, Jalmari (1941) *Suomen historian ääriviivat*, Porvoo: WSOY.

Jaakkola, Jalmari (1942) *The Finnish Eastern Question*, Porvoo: WSOY.

Knuuttila, Seppo (1999) “Sankariaika: Suomalaisessa kansanrunoudentutkimuksessa 1930-luvulla”, *Ajan paineessa*, Helsinki: SKS.

Luukko, Armas (1965) ”Jalmari Jaakkola”, *Suomalaisia historiantutkijoita: Historiallisenyhdistyksen juhlakirja 1890-1965*, Porvoo: WSOY.

Manninen, Ohto (1980) *Suur-Suomen ääriviivat*, Helsinki: Kirjayhtymä.

Niiteemaa, Vilho (1964) “Jalmari Jaakkola”, *Historiallinen aikakaus kirja*, No.1.

Wilson, A. William, *Folklore and Nationalism in Modern Finland*, Bloomington: Indiana University Press, 1976.

邦語文献

井上紘一「カレワラとフィンランド民俗学」『言語』Vol. 14、1985年。

石野裕子「フィンランド叙事詩カレワラ研究とナショナリズムー民俗学者カーレ・クローンのカレワラ解釈の変化をめぐってー」『国際関係学研究』No. 28、津田塾大学、2002年。

石野裕子「<研究ノート>歴史学者ヤルマリ・ヤーッコラの生涯と研究活動」『北欧史研究』No. 16、バルト＝スカンディナヴィア研究会、2002年7月。

石野裕子「カレワラと歴史ー政治と文化の間ー」『歴史と地理ー世界史の研究ー』山川出版社、2002年8月。